

明治三十六年七月三十日發行 毎月一回三十日定期發行
明治三十六年七月三十日第三種郵便物認可



第壹號

〈復刻版〉

大日本消防協會◆編

鈴木 淳◆解説

大日本消防協會雜誌

全7卷
別卷1

草創期の日本消防の足跡を知る根本資料、待望の刊行！

綠蔭書房

刊行にあたって

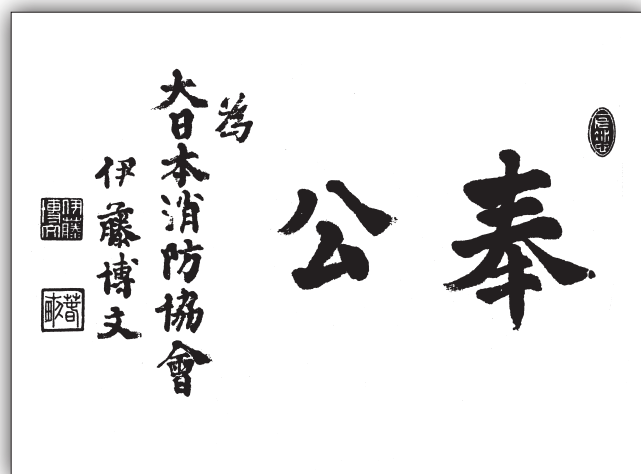
大日本消防協会は明治三六年五月、斯界の渴望に答えて、全国各都道府県警察部に支部を置く強大な組織として発足しました。そして同年七月に機関誌『大日本消防協会雑誌』が消防雑誌の嚆矢として誕生します。

本誌『大日本消防協会雑誌』は法学博士戸水寛人を雑誌編集監督に据え、伊藤博文、大隈重信、大山巖、山県有朋などをはじめ、各県知事及び警部長が名誉会員となり、賛助員には、板垣退助、犬養毅、穂積陳重、大倉喜八郎、榎本武揚などが名を連ねています。

本誌は、明治期の日本消防の言論・動向・活動・状況等が克明に記録され、また当時の災害・防災の実情が分かる歴史的資料ですが、今日では散逸のため、原本を見る事が難しい貴重な雑誌です。特に五四号以降は一部を除き、大学図書館・関係機関にも無く、研究者・関係者には、未見の雑誌と言われていました。弊社では長年、同雑誌を博搜し、七一号（明治四四年一月）まで収集しました。

本年、消防団一二〇周年・自治体消防六五周年を機に、草創期の日本消防の足跡を知る根本資料として、また黎明期の日本消防を主導した先駆誌として本誌を復刻刊行します。

平成二五年七月



第18号巻頭の折込

日本消防の歩みを示す絶好の資料

秋本敏文

財団法人 日本消防協会会長

大日本消防協会雑誌の復刻版が製作されました。日本消防協会としては自らの歴史をたどる資料でもあります。それ以上に日本消防の歴史、特に草創期の日本消防の動きを知る上で絶好の、というより唯一の資料といえる貴重なものだと思えます。

行政としては、警察の一部門でありまして、消防の使命に即した独自の活動の展開をめぐらし、そのための組織づくりを進めようとした先達の方々の強いお気持ちが一ひしひと感じられます。ご関心の対象は、国内消防の現状だけでなく、当時としては先進の装備等をもつ欧米の消防にも向けられています。このようなお取り組みを頂いたことの積み重ねが今日の日本消防の姿として実を結んだのでしょう。私たちは、先達の方々のこのお気持ち、ご尽力を受け継いで、これからの日本消防の一層の充実に努力しなければならないと改めて思う次第です。

発刊に寄せて

大江秀敏

全国消防長会会長

自治体消防制度が六五周年、さらには明治二七年に消防組規則制定から一二〇年を迎える節目となるこの年に、日本の近代消防の歴史を知る上で貴重な史料である「大日本消防協会雑誌」が復刻版として刊行されるにあたり、心からお喜びを申し上げます。

本雜誌は、近代消防の黎明期に日本の消防とともに歩み、その折々の消防時事等を克明に記されてこられました。そのため、当時においては消防の動向等を知る上での貴重な情報発信源としての役割を担い、今日においても近代消防の足跡を記す貴重な文献となっております。

私たち全国消防長会といたしましても、本雑誌の果たしてこれれた功績に、心から敬意を表するとともに、安全・安心な街づくりの実現を目指した消防行政を運営する上での資料として、消防の職に携わる全国の消防職、団員のみならず、消防関係者の皆様にもお読み頂きたい一冊であると信ずるものであります。



本會贊助員
海軍中將正二位勲一等子爵
榎本武揚君



警視廳第二部長 松井茂君之肖像

発刊に寄せて

岡崎浩巳 総務事務次官
前総務省消防庁長官

このたび、復刻版「大日本消防協会雑誌」が、発行されるにあたり心からお喜び申し上げます。

本書は、明治期の日本消防の動向・状況を克明に記録した「大日本消防協会雑誌」の創刊から第七一号までを全七巻にまとめ、復刻版として発刊するものであり、消防に関する様々な論説や当時の火災の状況など日本の近代消防の足跡を知る貴重な基礎資料であります。

本年は、消防組織法が施行され、自治体消防制度が発足して六五周年となる節目の年であります。その間、我が国の消防は、関係各位のたゆまぬ努力の積み重ねにより、着実な発展を遂げ、国民の安心・安全の確保に大きな役割を果たしてまいりました。その記念すべき年に合わせて本書が刊行されますことは、誠に意義深いものがあります。

本書が、近代消防の歴史を振り返る貴重な文献として、消防・防災関係者に活用されることを願う次第であります。

推薦のことば

襲田正徳 一般財団法人 日本消防設備安全センター理事長

明治時代は、我国近代消防の基礎が築かれた時代である。消防は、国家が行う行政警察の一部と位置づけされたが、実際には、その組織や運営は様々であった。明治二十七年には、勅令により「消防組規則」が制定され、全国各地に、消防団の前身である消防組が誕生した。

明治三十六年には、大日本消防協会が設立され、機関誌「大日本消防協会雑誌」が発行されることとなった。同誌には、消防行政のあり方に関する論説、火災事例や第一線の消防の実情など多彩な記事が掲載されており、明治期の日本消防の動向や状況を知る上で、貴重な資料である。

しかるに、研究者・関係者には未見の号が多くあったところ、このほど、永年同誌を収集してこられた緑蔭書房が、創刊号から第七一号までの復刻版を刊行されることとなった。出版事情が厳しい中で、学術的に貴重な資料を復刻されることに心から敬意を表するとともに、消防・防災に対する国民の関心の高まっている今日、誠に時宜を得たものであり、広く江湖に推薦する次第である。

第一號 祝辭祝文

祝辭 祝文

子爵 榎本 武揚
我邦到處火災多く、往々人命を傷ひ財産を失ふの悲惨を呈するは、家屋の木造多き爲めなると、消防の設備完からざるに職由せずんばあらず。而して家屋の建築を歐米諸國に倣ひ鐵骨又は石造と爲すか如きは殆んど不可能事なるか故に、消防の改良發達を圖り以て災害を少からしむるは洵に方今の急務なりと謂ふ可し。今や大日本消防協會は此急務に應せんか爲めに創立せられ且つ消防家の地位を高め之か遺族救護の道を計らんとし、其主義を鼓吹するか爲めに機關雜誌を發刊す、予は協會か斯る抱負を以て創立せられたるを喜び、益々奮勵して其目的を達せられんことを望む。

祝辭

北海道廳長官男爵 園田 安賢

凡そ人世に貴重なる者生命財産に過るはなし、故に文明諸國皆之れか保護の道を講し唯及はざらんことを恐る、其危害の天然地變に出る者と雖も、人智の進歩に隨て漸く之を減ずることを得、就中火災の如きは固より天爲にあらず、注意の如何に依り能く之を未然に防くことを得るのみならず、其既に發するに臨んても亦人力を以て之を防止することを得べし、然れども本邦家屋の制尙未だ完全ならず、木造茅屋相接し頗る火災を招き易く、加ふるに消防の準備亦盡さざる所あり、一たび火を失すれば往々にして全市を燒盡し、巨多の財産を擧げて烏有に歸し、併せて死傷の悲惨を見るに至る、其災の小なる者に至ては之を數ふるに遑あらず、年々歳々之れか爲め消失する財産は實に計るへからざるものあり、高島子爵等深く此に憂ふる所あり、頃者大日本消防協會を創立し、普く防備消火の道を講し以て此災を防かんとなす、余も亦常に同憂を懷けり、今本會の起るを見て誠に欣喜の情に堪へず、聊簡辭を寄せて其盛盛を祝すと云爾。

大日本消防協會の創立を祝す

我大日本帝國は、氣候溫暖にして、風光明輝、土地沃饒にして、諸多の天產物に
法制局長官 一木 喜徳郎
法學博士
第一號 祝辭祝文 九

「大日本消防協会雑誌」復刻版の刊行にあたって

小林恭一

東京理科大学大学院・国際火災科学研究所教授
(元総務省消防庁国民保護・防災部長)

現在、日本は、前例のない巨額の債務と高齢化社会の進行で、経済・社会の改革は不可避となっている。消防も例外扱いは難しい。現在の建築物の防火レベルを前提に、消防組織と消防力をどう設計すれば日本が到達した安全水準を維持し、又は改善していけるのか。巨大地震災害や津波災害にどう立ち向かうのか。国家的危機管理にどんな役割を果たすべきなのか。戦後の消防組織法・消防法制定以来の大きな変化の時代がやって来ている。そんな時代の舵取りに、歴史認識は不可欠である。消防はどこから、どうやって、こゝまで来たのか。そのことを知らずに、改革はできないし、すべきでもない。

「大日本消防協会雑誌」は、明治初期からの消防の歴史を知る、貴重な一次資料である。今般、その復刻版が刊行される。これまでわからなかった消防の歴史の一端が明らかになるに違いない。誠に時宜を得た企画であり、消防行政に長く携わって来た研究者として、その刊行を心待ちにしている。

復刻版『大日本消防協会雑誌』の発刊によせて

小林輝幸

前日本消防検定協会理事長

日本の消防は、今や世界に誇れるものとなっています。そして、今日の消防は、先人の弛まない努力の賜であることは誰もが認めるところであり、これを礎として発展の道を歩んでいます。

そうした先人が築いてきた歴史の中で、近代消防へ向け、大きな飛躍を遂げた時代、それは明治時代であつたと思われまふ。

行政組織は、警察の一部であつたにせよ、「消防組規則」の制定、消防装備の近代化、予防行政の基となつた建築規制など、先進諸国を範とし、正に近代消防の先駆けとなつたのがこの時代です。

しかし、こうした時代背景や先人の思いなどは、一部の消防機関等が発行した年史により垣間見ることができまふが、当時の資料を直接目にすることはなかったと思われまふ。

この度発刊される『大日本消防協会雑誌』は、この近代消防へと大きく動き出した明治という時代の先人の考えや思い、背景を知る貴重な資料であり、本書が、多くの方々に活用され、これからの消防を考える一助とされることを期待しております。

第拾壹號

紙上講義

三三

紙上講義

消防警察論

日本法律學士 中島 晋 治述

第二節 維新後に於ける消防
第一項 明治維新より消防の沿革
明治維新の度、諸事其舊を改む、火災消防に關する制度の如きも漸次に整備し、今や消防署及警察署の機關となり、蒸汽脚筒水道消火栓の設備其他新進の器具器械を整ふる等至り盡せりと云ふべし、之を維新前後特に舊幕府の消防制度に比すれば其變遷したること豈啻に霄壤の差のみならんや、實に世の思ふより云ふべし。

明治元年大坂の時に際し、舊來の火消役を廢し、之を軍隊に委し當時兵部省中別に火災防禦の隊伍あり以て舊火消役の任務を行へり、而かも町火消に至りては依然之を存置し其管理を南北市政裁所に屬せしめたり、即ち南北市政裁所は舊町奉行所を以てなり、而して同年八月更に之を東京府の管理に轉屬したり。明治二年兵部省内の火災防禦隊を廢し特に町火消をして郡の内外を問はず消防に従事せしめたり、此年始めて府兵を徴き府下を鎮撫せしめ傍ら消防の補助をなさしむ、其規則

(6)

雑誌 纂

天氣と地震との關係

理學博士 大森 房 吉

俗に春し曇き日には地震すと稱すれども、東京等の地方にて一日中地震回数が最多なるは氣壓の高き時期に當るを見れば地震は寧ろ晴天即ち高氣壓の時期に多くして、春し曇きとき、即ち低氣壓の時期に少かるべしと思はる。米國、印度等にては春し曇き氣候には地震あらんなど、稱すれども統計上の根據とては無きに似たり、英國の文豪カーライル氏は其著書たる佛國革命史中に伏暗なる天氣が地震に先だつてつく……と記せり、何に依りて左る引證をなしたるやを知らざれども、之れ却つて實際に近きものなりとす。

▲破壊的地震と天候 震災豫防調査會編纂の大日本地震史料に依るに顯著な大地震の起れる日の天氣は左の如くなり

慶長元年閏七月十三日、天晴(京都)午前一時頃山城・攝津、和泉等の諸國大地震、伏見城天守崩壞翌十四日より十七日迄天晴、十八日は雨風
元祿十六年十一月二十三日午前三時頃江戸及び相模・安房、上總等大地震、當日江戸にては晴天、京

日本の近代消防の黎明期を知る貴重な資料

関澤 愛

東京理科大学大学院・国際火災科学研究所教授

復刻版「大日本消防協会雑誌」が発行された当時の明治末期は、日本が明治維新からの急速な近代化を成し遂げるとともに、日清日露戦争を経て、幕末以来の不平等条約の改正を達成し、曲がりなりにも西欧列強の仲間入りを果たしたという時代である。いっぽう、街並みとはいえば未だ木造密集市街地が連なっている状態で、そのため度々大火の被害に悩まされていた。都市の防火対策、消防対策については近代化以前という時代であったといえよう。

第二次世界大戦後に大いに発展した現在の近代消防の姿しか知らない今日の我々にとって、今から思えば終戦のわずか三五年前でしかない明治末期の消防に関する記録は、当時の消防関係者がどのように問題を捉え、また取り組もうとしていたかを知るうえで大変興味深い資料である。復刻版の中身を散見して最も印象的であったのは、記事の内容が、消防組織に関することをはじめ、国内外の火災事例、消防技術、消防設備の解説など大変多岐に亘ることである。とりわけ海外の消防事情を紹介する記事の多さには目を見張るものがある。翻って、現在の我々はどれほど海外の消防行政や消防技術の動向にアンテナを広げているだろうか。

この復刻版「大日本消防協会雑誌」の意義は、単に過去の消防事情の記録としての価値だけでなく、坂の上の雲を指すがごとく当時の消防関係者がいかに海外の新しい情報を吸収しようとし、また消防近代化に努力していたかを伺い知る機会ともなる点にある。消防関係諸氏はもちろん、多くの方々にもぜひ一読してもらいたい貴重な資料である。

歴史的価値のある資料

長谷川彰一

危険物保安技術協会理事長

本年の消防記念日（三月七日）は、昭和二十三年（一九四八年）に現在の自治体消防（市町村消防）制度を発足させた消防組織法が施行されてから六五周年にあたります。また本年は、明治二十七年（一八九四年）二月に日本全国に消防組を設置することを政府として法令で定めた消防組規則が制定されて一二〇年目に入った年であります。

そして、この消防組規則の制定から数えること九年後の明治三十六年五月に、消防制度の発達進歩をはかり消防に携わる者の顕彰や共済をすることを目的として大日本消防協会が設立され、同年七月には「大日本消防協会雑誌」が創刊されました。この雑誌は、当時の消防に係る様々な出来事、先人の方々の論評などが克明に残された歴史的価値のある資料ですが、残念ながら現在ではほとんど目に触れることのないものとなっております。

本書は、この「大日本消防協会雑誌」を復刻版としてとりまとめられたものです。私が、東京消防新聞の河野氏からこの雑誌の復刻のお話を伺ったのは、自治体消防六〇周年の頃でありました。そして自治体消防六五周年・消防団一二〇年の区切りの本年、本書が発刊される運びとなりましたことは、大変喜ばしいことと存じます。この間、この復刻版を編纂するために多大なご苦勞をされた緑蔭書房の方々に深く敬意を表しますとともに、心からお祝い申し上げます。

我々消防人にとって、また、今後の消防活動・消防行政にとって当時を知る大変貴重な資料であり、様々な機関で活用されることを大いに期待するものであります。



本會評議員
法務局長官學士
一木喜徳郎君



本會編輯監督員
法學士戸寛人君



福井県加斗村消防組之圖

日本消防関係年譜

明治元年 火消役（定火消・大名火消）全廃。町火消は存続。

明治3年 東京府消防局できる。町火消一二組廃止、三六組残す。

明治7年 警視庁ができて、消防事務を取り扱う。

明治13年 警視庁消防本部を創設。

明治14年 警視庁消防本部が消防本署と改められる。

明治17年 消防規則を定める。

明治21年 わが国で火災保険が創始。

明治24年 警視庁消防本署を消防署と定め、六分署を置く。

明治27年 消防組規則公布（勅令一五号）。初めて義勇消防に法的地位が与えられる。

明治29年 東京警視庁消防部長を置く。署を消防本部、分署を署とする。

明治34年 三陸大津波地震で死者二一九、五九人。

明治36年 ベルリン万国消防博覧会開催、日本から松井茂出席。

「大日本消防協会」設立。同年七月機関誌『大日本消防協会雑誌』を創刊。初代会頭に高嶋鞆之助男爵、評議員に一木喜徳郎内閣法制局長官以下内務省局課長、支部長に各府県警部長（後の警察部長）。

明治43年 「大阪消防規定」を公布し、大阪に特設消防署設置。名古屋に常備消防を置く。

大正2年 京都府常備消防を置く。

大正3年 警視庁消防練習所設置。

大正4年 国産の消防ポンプ自動車完成。

大正8年 勅令三五〇号特設消防署規定によって、大阪、京都、神奈川、兵庫、愛知に特設消防署設置。

大正9年 わが国最初の火災報知器を日本橋に二四基設置。

大正10年 公衆用火災報知器を街頭に設置。

大正12年 関東大震災。一府六県にわたり、罹災者三、四〇五、〇〇〇人。

大正15年 神宮外苑日本青年館で初めて全国消防組頭大会を開催。

9



(22)

信 通 書 寄

莒城縣通信

(27

借 通 書 齊

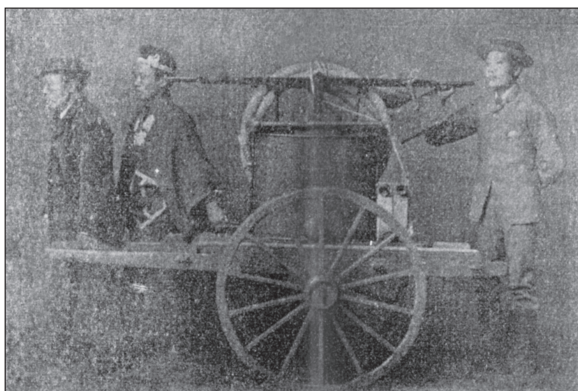
樺太島海西岸マウカの消防組

中野常吉

新橋上流の樺太半島より余等前居屋下に屬す消防機の一
如き此類なる樺太半島より余等前居屋下に屬す消防機の一
消防用の爲に設備し置たる一箇箇所此の際や形式式
を寄附せ公私兩利の一實績に備はる此の際や形式式
地殆ど壹千坪に區劃せられ家屋の新築並居屋別荘
新市街は念は愈々膨脹せるの狀顯著なり去は金
が警火の念は日々膨脹せる夜半市面を巡遊警火
と一再しに不止し然るに何たる不事可憂
可恐哉氏は昨年八月廿五日午前三時市街中
に於て最も繁華たる大連町を幾へり用水の便使
消防組の設置なる當時市街中を巡遊せし
當時市街の周章喧嘩や文狀許すべくも
に八條捨此日の風失火に官民必死の勢なり僅か
に八條捨此日の風失火に官民必死の勢なり僅か
つ此の機失に際し余設備の叩筒は多少の力を添へ
つ此の機失に際し余設備の叩筒は多少の力を添へ
市街地の區劃せられより半歳ならずし最良

既に如此然しある消組騒ぎの事一日も忽に予に
 既ならず果然此時の予、吾様太守衛隊司令官には
 消防組織に關する規則を發布せられて、予を驚
 患兵分隊長石原繁樹は主として「ウツ」消防
 と總事の事に熱心着手する人操等閑然とする所く
 全員昨午拾名廿三日憲兵分隊前庭に小酌壯盛
 發式等々を舉行した。此の時石原分隊長の儀
 行發式等々頗る盛況に當りたる當時様服整齊の
 ながらしたる拾人拾しの出立は吾「ウツ」に
 は不可見の珍歎なりを以て一同紀念の攝影をな

新開地狀体と云へば、朝の如く押寄て來る者多敷
 小肚血氣の獨身者なり。壯者に永住の決意なく
 偶然なり。然れども、壯者に永住の決意なく
 壯者を以て石原分體は單に小壯者に重なる不
 動して年輩の如何不拘永住の目的を以て異族な
 び提げたる渡來者即ち比較的の愛土心に厚く、大
 び越へたるは彼れより大なるの見識なく、すべ
 して不備なり。昔青島に昨年未御用船大丸にて
 朝簡式等屬品、式及者來等來。大丸にて本
 年四月の出航に外観内容立派な式を奉
 行した夫より全員皆に毎夜喧嘩の便法を練
 行し三週日に至りて漸に於て各員熟練の結果



(一 其)



(京町非常門附近の惨状) 新吉原大火之實況



(二 其)



橫濱市水道斷水、平沼橋臨時給水所

員 助 贊

◎本會贊助員及名譽會員の氏名左の如し
贊助員

內務次官 伯爵 板垣退助
衆議院議員 法學博士 一木喜德郎
犬養毅

內閣統計局審查官	吳文聰
辯護士	法學士 山田喜之助
韓國衛生顧問	衆議院議員 山根正次

石川 富山 島根 岡山 廣島 山口 香川 福岡 佐賀 熊本 沖繩

石原 磊三
大芝 惣吉
信太 時尙
和田 潤
兄玉 利實
萩原 昌朔
岡田 忠彦
大味 五郎
川越 壯介
佐藤 勸
窪谷 逸次郎
永田 秀次郎
和田 勇

[illegible]

(62)

員 役

◎本會役員の氏名左の如し

伯爵

同	同	同	同	同	同	評議員	編輯監督	同	同	理事	副會頭	會頭					
丸山重俊	久保田政周	窪田靜太郎	仲小路康	樺山資英	岡喜七郎	戸水寛人	林田龜太郎	井上孝哉	一本喜徳郎	法學博士 法學博士 法學博士 法學博士	石川晋治	中島	藤崎虎二	古賀廉造	安立綱之	芳川顯正	伯爵

評議員	同	文部部長	北海道	京都	神奈川	兵庫	長崎	新潟	埼玉	群馬	千葉	靜岡	岐阜	宮城	福島	山形
法學博士																
水野鍊太郎	森田茂吉	財部實秀	藤崎虎二	池上四郎	平塚廣義	內村直俊	川崎卓吉	楯石驤二郎	名尾良辰	渡邊忠壽	夏秋十郎	龍岡篤敬	松村才知	堀田義太郎	新妻駒五郎	阿部龜彦

法學博士

森田 茂吉

(61)

いたすとも三人以上一時に出ては成らぬと定め置
け、ハ、ハ、ハ、長こまりました……が御前出火は何れ
報知が参るのでございます。機馬鹿を言ふナ火消
即で失火を他から報知する、様な事で成るものか
「ハ、ア、成程然りたせば機代りの足代の上へ人
を絶えず登らせ置かねばならぬや。機勿論の
事だ機番は定め置て一人づゝ交代させ晝夜四邊に
眼を配らせねば成らぬ。杉早速其役を定めませう
機「コレ」貢、機番は柔術家に限るぞ。杉、ハ、
何故でございます。機、機がアノ通りであるから萬
一落るとも怪我のないやう、柔術家なら誤て落て
も途宙で身をあやなして地上へビヨイとなつたら
怪我がない……織田様には猫のやうな人が居ると
見えます……
機番にあてられた柔術の先生彼の機の木へかけた
足代を登り松板を並べた臺へ足を停めて四邊を見
廻して居る大炊頭は機先へ出られ遙かに高き臺を

事々々燃るゝと騒ぎ出した、丁度正午で大炊
頭今膳に向ひ箸を取られた處で此を聞かれ機
先へ出られ、機誰だア、小川だナ、ハ、ハ、ハ、御前
およろこび遊ばせ火事です、然も近い火事です……

高頭新門辰五郎

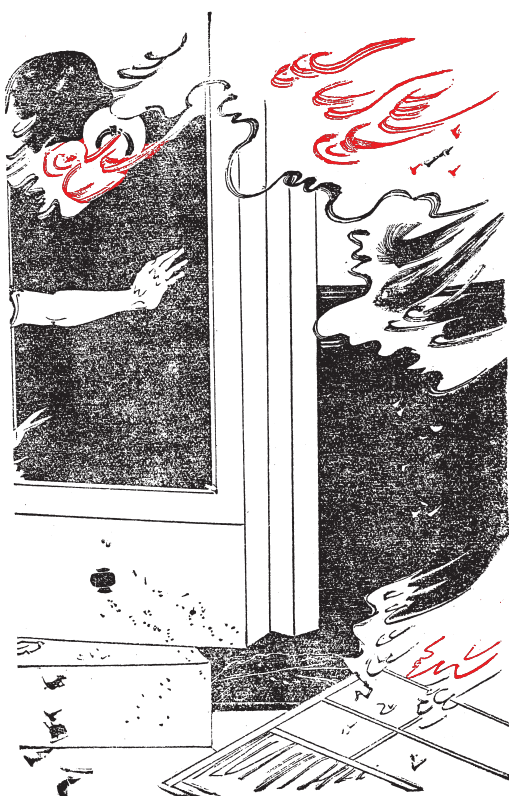
梅 雨 生 口 演

第一席

大日本消防協會の御好みにより本號より新門辰五
郎の傳を續けます、此人は只今で申しますと、消
防組頭、其の頭おのの齋の者で、火消の頭取で、
今以て淺草公園に於きまして新門と云ふと、名高
きものでござります、當時町火消いろは四十八組
の内、を組の辰五郎と申しますと、弱きを扶け
強きを挫くといふ、ほんの義侠を以て江戸市中に
其名を賣りました純粹の江戸つ子で御座ります、

見あげて、機、何様だ先生高からうナ、口高うござ
います、私どもでさへ下を見ても目が廻ります、成程
柔術心得のものでなければ登ては居れません、ハ、
機、さうだらう随分遠くまで見えやうナ、口見え
ます御城隅々まで一目です、機、火事はないか
口有りません、機、貢、機、ハ、ハ、機、加能越三ヶ
國の大雷盆を檀子木一本でかきまはして居る奴が
ある大炊が此度の勤役が幸ひ其もの、臍を冷させ
て呉るは、どうだ失火は見えぬか、口見えません
機、はやく出火があればよい未だ見えぬか、待つ
事は遅いものだ、先生達まだ見えぬか、口どうも
見えません、口御前然うお待かねなら一寸何處か
へ放火ませうか、機、馬鹿ナ事を……大炊頭も今は
忘れたやう聞もされず、機、はんも見廻しあきて、
臺のうへを居眠り場處として、サア代らう拙者が
是から一時居ねむり番だ、といふくらゐ……或日
居眠り番の先生臺のうへで大聲をあげ、ハ、ハ、ハ、火

元來々々齋の家に生れたと云ふ人ではございませ
ん、親も煙管張の職人で御座います、辰五郎は性
質至て孝心で、夫れが爲め齋の者になりました、
其譯は是よりおいと辯じます……
其頃、下谷掃除町に村田屋金兵衛と申しまして煙
管張の親方が御座りました、此金兵衛は生れつき
が巧者の上に若い頃より便込んだ腕でありますか
ら、出來の相場物なんか張て居る職人とはわけ
が違ひまして、村田張の煙管と申しますと、全國
に名高きもので御座ります、今亦て繁昌致して居
ります、兩國横山町の村田と申します煙管屋
が店をござりました、内には弟子兄も澤山使ひ、
今日を寛に暮して居りますが、家族と申しまして
は夫婦きり、金兵衛もおいゝ取る年であります
から、どうかして子供を一人欲しいのだ、と夫婦
の者が明春神佛に願をかけなどして、種々心を苦
しめて居りましたが、其の内妻が只ならぬ身とな



紙上講義

消防組合に就て

警視兼事務書記官 松井茂

余輩は前號に於て組合の何物たることを論究したるを以て茲に第一章に於ては任意的消防の規約を第二章に於ては其職務規程を述べ、我邦將來の立法上の參考に資せんとするものである。

第一章 規約

第一、目的及分類

第一條 任意的消防隊は男姓の住民の結合にして、其住民は消防上の危険に際し、既定の方法に依り補助を行ひ、其警務區域に於ける官廳の請求に依り、其他危急の場合ありたるに於て、一般の危険に對し、軍隊的組織の軍隊的服裝、出場手續並に演習等を行ふべき義務を有すべきものとす。

第二條 消防隊は獨立せる法人にして、其代表すべき行政機關、並に固有の指揮者を有し、火災場面に在りては、地方警察官廳より定められたる消防指揮者の指揮に従ふべきものとす。

第三條 消防隊は之を次の三種の組合員に分つべきものとす。

大日本消防協會雜誌第叁拾叁號

(第百四號)

論說講義

地震と警察及消防

藤崎虎二

本篇は編輯部が本書の編め記者に向つて請託せられたる要領を筆記せしめたり故に文章記者にあり(記者)

(1)

由來丙午の年は災害多しと傳ふ、夫れから本年は地震及び火災の襲來すると數々である。地震と火災との關係及び之に備ふる消防問題を研究するは、穴勝も無用のことではあると思ふのである。就ては先づ地震のことに就て一言御話しを致したいが、私は彼の尾續震災の時には名古屋に居りましたが、あの時の地震は實に非常なる激震であつて、何にしろ一時に十八ヶ所から火災が起つたので、從つて死んだ者も負傷した者も非常な數であつた。夫で大に感じたことがある、夫れは大抵な人はあの位の地震に遭遇したこともないし、殊に突然さあの大震であつたものだから何の考もなく警察官も平生行ひつゝ來つたところの

主な連載記事

米国の消防制度 (全3回)

消防改良論 (全8回)

火災報知機の進歩 (全4回)

善光寺大地震大焼の有様 (全4回)

消防器具の設備と其の応用 (全6回)

消防器具の改良に於いて (全4回)

燃焼 (全3回)

東京の水道 (全5回)

消防警察論 (全7回)

火災保険談 (全5回)

東京の消防 (全19回)

東京火災略史 (全16回)

各国消防制度 (全11回)

伯林万国消防博覽會出品説明書 (全8回)

消防制度の法律上の基礎 (全3回)

鷹頭新門辰五郎 (全5回)

義侠本町丸網五郎伝 (全5回)

丸山火事 (全4回)

加賀篤文五郎の話 (全7回)

織田大炊頭 (全4回)

主な主要記事

消防の種類及組織に就いて

桑港と江戸の火事

天氣と地震との關係

吉原大火災

火災予防と建築警察

消防自動車隊解説

消防事業の進歩

火災保険公營論

石油の取締

第三回万国消防會議報

主な執筆著

松井 茂 (警視兼内務書記官・法学士)

戸水 寛人 (本会評議員・法学士)

有松 英義 (内務省警保局長)

榎本 武揚 (子爵)

大谷嘉兵衛 (東京火災保険取締役)

福田常次郎 (工学博士)

中島 晋治 (本会専任理事)

土田團之助 (消防機關士)

阿部 莊三 (文学士)

林田龜太郎 (衆議院書記官長)

浅野 応輔 (工学博士)

大道 良太 (法学士)

妻木 頼黄 (大蔵省技師・工学博士)

池田 慶三 (警視庁技師兼内務技師・薬学士)

大槻 文彦 (文学博士)

一木喜徳郎 (法制局長官・法学博士)

大森 房吉 (理学博士)

芳川 顯正 (本会会頭)

本田 静六 (林学博士)

生江 孝之 (宗教家)

石川 三省 (本会理事)

春日井柳堂 (漢詩人)

邑井 一 (講談師)

池田 慶三 (薬学士)

藤崎 虎二 (本会理事)

安立 綱之 (内務省警保局長)

鈴木庄之助 (長野県警視)

今村 明恒 (地震学者)

井上 圓了 (文学博士)

園田 安賢 (北海道庁長官・男爵)

吳 文聰 (内閣統計局審査官)

長松 篤策 (男爵)

本資料の特色

1 消防雑誌の嚆矢である本誌を、創刊号（明治三六年七月）から第七一号（明治四四年一〇月）まで、中断後に再刊した一四冊を含む総六九冊を収録した。

2 本誌には、町火消の有名人の紹介、出初式の様子、全国各地の火災事例、第一線の消防の実情など多彩な記事が克明に記録されており、草創期の日本消防の歴史や当時の災害・防災の状況が分かる貴重な文献である。

3 本誌は、消防界の中心的な役割を担った学者や専門家の論説・論文及び海外情報を数多く掲載。消防行政のあり方を示し、黎明期の日本消防を主導した先駆誌である。

4 本誌には、口絵が多数収録されており、当時の状況をリアルに映し出している。

5 本誌の足跡は、そのまま近代日本の消防沿革史である。

6 別巻には詳細な「解説」と「目次総覧」「事項別総目次」「執筆者別主要記事索引」を付し、利用者の便を図った。

雑 録

善光寺大地震大焼の有様（承前）

長野縣警視 鈴木庄之助

私領分信州松代去月二十四日夜大地震以來の次第追々先御届申上候處城下は茂衆の方に當り六七里程隔り候山中水内郡伊折村梅木村念佛寺村和佐尾村椿峯村上祖山村地京原村日影村鬼無里村等に亘り候大姥山虫倉嶽と申高山同夜震動初級の始末近頃漸く道路出見分爲仕候處右九ヶ村の儀は別て大災に御座候處其内にも伊折村和佐尾村梅木村地京原村念佛寺村の五ヶ村右山麓間迄にて念佛寺村の内平澤組臥雲院組梅木村の内城の越組親澤組地京原村の内藤澤組横道組伊折村の内大田組高福寺組横内組荒木組和佐尾村の内栗本組都合十一組の内民家七十軒程人別百九十九人馬三十九匹無路死中に押埋組々多分の亡所に相成申候且亦右村々近村の内にも黒沼村の儀は家數四十四軒人別三十三五人の内幾家五軒に相成外にて十九軒人別六十人馬六疋并山田中村の儀は家數三十九軒人別七十二人馬亦路形も無之土中に埋亡に相成候程の儀に付間近の村に變地潰家死人殊の外夥敷御座候處に候得共未取調行届覺候前條村々等は里地と違ひ村立新地も山路相隔り高目に不似合地廣にて物毎手邊の上總て平常も若石最重の邊を一步通り同様の險路に御座候處此度の火災にて元の道形致滅却候故當分巨細の見分届

火災彙報

◎吉原千住の大火

報 彙 災 火

▲吉原廓内始と全城廓外三方へ延焼す凄じき稀有の惨狀 四月九日午前十一時三十分新吉原江戸町二の廿貨座敷美華登樓時鈴木濱之助方より發火し朝來吹き竄りたる南の烈風のため火は凄じき勢ひを以て瞬く間に隣家新花井樓を焼き夫れより猛火は京町一丁目目へ出づるよと見る間に火先は三方に散じ一は角町方面に向ひ風力に煽られて漸次湯屋町、江戸町一伏見町に渡り角海老其他の大火は是れ亦忽ち炎たる猛火に包まれ悉く焼盡せり、又仲の町方面に延焼せる火は同様に焼比せる各引手茶屋を焼拔き衣紋板の兩側に及び向も日本堤に到りて同警署署を焼き、火勢益々猛烈を極め南方より北へ、こ押進み田中町方面へ吹き付けたり又一方には午後零時十分頃下谷龍泉町二の六番地某家へ飛火し附近へ延焼しつゝあると同時に今戸町方面へも延焼し勢一層鋭く更に千住方面に向ひたり、日本堤にては此の如く、新川屋其他の飲食店何れも焼失せり、是より先江戸町二非常口方面に向へる火先は東に轉じて千束町、田町方面

(48)

号数	発行年月	巻数
26	明治38年 9月	第1巻 (全6冊)
25	明治38年 8月	
24	明治38年 7月	
23	明治38年 6月	
22	明治38年 5月	
21	明治38年 4月	
20	明治38年 3月	第2巻 (全11冊)
19	明治38年 2月	
18	明治38年 1月	
17	明治37年 12月	
16	明治37年 11月	
15	明治37年 10月	
14	明治37年 9月	第3巻 (全12冊)
13	明治37年 8月	
12	明治37年 7月	
11	明治37年 5月	
10	明治37年 4月	
9	明治37年 3月	
8	明治37年 2月	第1巻 (全6冊)
7	明治37年 1月	
6	明治36年 12月	
5	明治36年 11月	
4	明治36年 10月	
3	明治36年 9月	
2	明治36年 8月	第2巻 (全11冊)
1	明治36年 7月	

号数	発行年月	巻数
52	明治40年 11月	第4巻 (全12冊)
51	明治40年 10月	
50	明治40年 9月	
49	明治40年 8月	
48	明治40年 7月	
47	明治40年 6月	
46	明治40年 5月	第5巻 (全12冊)
45	明治40年 4月	
44	明治40年 3月	
43	明治40年 2月	
42	明治40年 1月	
41	明治39年 12月	
40	明治39年 11月	第4巻 (全12冊)
39	明治39年 10月	
38	明治39年 9月	
37	明治39年 8月	
36	明治39年 7月	
35	明治39年 6月	
34	明治39年 5月	第5巻 (全12冊)
33	明治39年 4月	
32	明治39年 3月	
31	明治39年 2月	
30	明治39年 1月	
29	明治38年 12月	
28	明治38年 11月	第4巻 (全12冊)
27	明治38年 10月	

号数	発行年月	巻数
71	明治44年 10月	第7巻 (全8冊) ※は欠号
70	明治44年 9月	
69	明治44年 8月	
68	明治44年 7月	
67	明治44年 6月	
66	明治44年 5月	
65	※明治44年 4月	第6巻 (全8冊)
64	※明治44年 3月	
63	明治44年 2月	
62	明治44年 1月	
61	明治43年 12月	
60	明治43年 11月	
59	明治43年 10月	第6巻 (全8冊)
58	明治43年 9月	
57	明治43年 8月	
56	明治43年 7月	
(再刊)	明治43年 6月	
55	明治41年 2月	
54	明治41年 1月	別巻
53	明治40年 12月	

解説
目次総覧
事項別総目次
執筆者別主要記事
索引

別
巻

第7巻
(全8冊)
※は欠号

第6巻
(全8冊)

明治期の日本消防の動向・活動・状況を克明に記録した歴史的資料！

大日本消防協會雜誌

全7巻
別巻1

大日本消防協會編〈復刻版〉

◆解説者

鈴木 淳（東京大学大学院教授）

◆推薦者（五十音順）

秋本 敏文（財団法人 日本消防協会会長）

大江 秀敏（全国消防長会会長）

岡崎 浩巳（総務事務次官
前総務省消防庁長官）

襲田 正徳（一般財団法人 日本消防設備安全センター理事長）

小林 恭一（東京理科大学大学院・国際火災科学研究科教授）

小林 輝幸（前日本消防検定協会理事長）

関澤 愛（東京理科大学大学院・国際火災科学研究科教授）

長谷川彰一（危険物保安技術協会理事長）

◆刊行概要

■全7巻 創刊号（明治36年7月）～第71号（明治44年10月）

■別巻 解説・目次総覧・事項別総目次・執筆者別主要記事索引

■体裁 A5判・上製クロス装・ケース入り・総4、700頁

■定価 揃本体150,000円＋税（分売不可）

■刊行 平成25年9月刊

ISBN978-4-89774-329-5 C3321

お取り扱いは

緑蔭書房

〒173-0004 東京都板橋区板橋 1-13-1
☎ 03 (3579) 5444
[消費税が別途加算されます]

